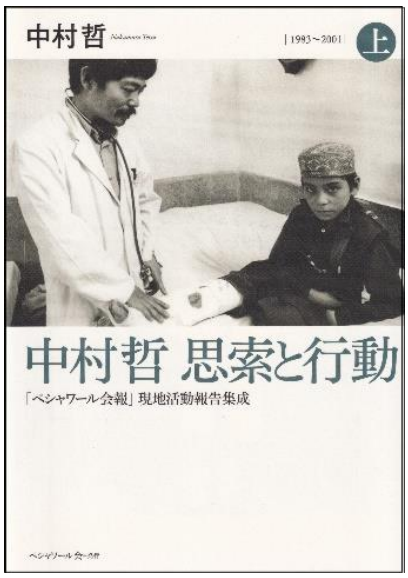
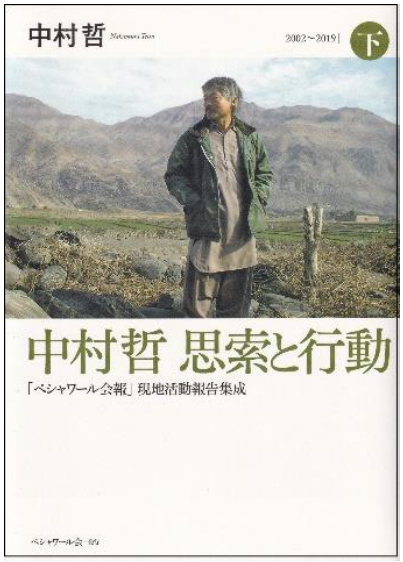
『中村哲　思索と行動　「ペシャワール会報」現地活動報告集成』（中村 哲著、上下）



最近の海外紛争のメディア報道は、主にパレスチナ自治区ガザを巡るイスラエル VS. ハマスの紛争やロシア VS. ウクライナの戦乱が報道の中心になっているので、40 年間に及ぶ内戦と大干ばつによるアフガニスタンの極度の疲弊はニュースで報道される機会が減った為か恰も内戦と混乱が収束しているかのような錯覚に襲われるが、実は戦争こそ一応の終結を見たものの、その後もアフガニスタン政府とタリバンの断続的な武力衝突が続き、テロ事件も多発している。

現在もアフガニスタンは大干ばつ・洪水、終わりの見えない経済制裁など多くの困難に直面し、治安情勢は極めて不安定で危険、戦禍と政情不安の中で荒れ果てた故郷を捨てて国外に避難した難民は 300 万人、それに加えて国内難民も同数の 300 万人に上っているという。

国連の情報によれば何らかの支援を必要としている国民は総人口の 6 割に及ぶ 2,500 万人に上るという世界でも最悪の状況と言われている。



さて、9 年前の本誌第 43 号（2015 年 6 月発行号）の図書紹介欄で同じ著者・中村哲氏の『天、共に在り　アフガニスタン三十年の闘い』を紹介したが、何分昔のことなので記憶されている方は居られないかもしれない。

しかし、５年前の 2019 年 12 月、アフガニスタン・ジャララバードで農業用水路建設工事を指揮するために車で建設現場に向かっていた同氏が同乗の現地スタッフ 5 人と共に凶弾に倒れた。
そのたった 2 ケ月前の 10 月にアフガニスタン政府から名誉国民証を授与された矢先のことであった。同地ではアフガニスタンのガニ大統領自身が棺を担いで政府・国民から国葬級の敬意が表されている感動的なニュース報道のシーンは未だ記憶に新しいところではなかろうか。

翻れば、同氏は 40 年前にパキスタン北西部のペシャワールに医師として派遣され、内戦下のアフガンやパキスタン最奥部の無医村で当時日常的に蔓延していたハンセン病患者達の治療に当たったり病院を作ったりして孤軍苦闘していたが、現地の 40 年に及ぶ戦乱と長引く大干ばつによって疲弊した土地からは水の一滴も麦の一粒も採れず、そのために大勢の現地の住民、特に乳幼児が殆ど餓死していき、残った人々もこの土地を捨てて難民として国外や都市部に逃げてゆく様を目のあたりにして、病気の治療もさりながらまずは人間が最低限生きていくための水の確保と農地の復旧が何よりも急務であると考えて医師の白衣を脱いで土木作業着に着替え、砂漠に井戸を掘り用水路を建設して高山の雪解け水を砂漠と化した元農地に配水する仕事に没頭された。

その結果、灌漑が復旧した農地が 1 万 7 千ヘクタール、畑作ができるようになった土地に 65 万人の元棄民の住民が帰還して農業に戻り、この用水路が今もこの 65 万人の命を支えるようになった矢先の

5 年前にどこかの暴漢の凶弾に倒れたのである。一説では、アフガニスタンでのこの用水路建設によって中央アジア山間部からの水を奪われるのではないかと邪推したパキスタン関係者が差し向けた刺客であったとも噂されているが、真相は闇の中らしい。

中村哲氏は、出身地福岡市に設立されたペシャワール会の援助の基に凶弾に倒れるまでの 37 年間を現地の土地に溶け込んで現地の寄る辺なき人々の命を守り、希望の灯を届けるべく熱い闘いに始終され、アフガンの僻地の一隅を照らし続けられた。

これらの苦闘は、病・貧困・戦乱・世界の不条理に挑む長い旅であったが、その彼の思索と行動は、20 冊以上の彼の著書に纏められていて、9 年前に本欄で紹介した『天、共に在り　アフガニスタン三十年の闘い』もその中の一冊であり、その数奇な半生を綴った著者初の自伝であった。

しかしながら、これらの著作は謂わば“書斎の机上で”書かれた書物であり、熟考を重ねて綴られた奥の深い内容となっているが、本号で新たに紹介した上下 2 巻の『中村哲　思索と行動　「ペシャワール会報」現地活動報告集成』は、著者が現地での忙しい活動の合間に現地の現場から福岡のペシャワール会事務局に定期的に送って来たレポートであるから現地・現場の様子が生き生きと描かれている。

用水路建設の手法や設計図などの素人には分かりにくい記事もあるが、現地の写真や地図が随所に掲載されていて著者や現地スタッフ、現地建設工事労働者のナマの声が伝わってくるようだ。

1991 年の湾岸戦争勃発に伴い、それまでにアフガニスタンに多数入っていた国連や各国政府の支援団体、欧米の民間支援団体などが相次いで撤退する中で唯一ペシャワール会の中村哲支援隊だけが現地に留まって、連日の空爆の中で医療行為や用水路建設工事を支援し続けたことがアフガニスタン人の日本人への評価を揺るぎないものにしたと言われている。

そのような状況の中で、著者が現地から送って来た報告記事の一部を引用して筆を擱くこととする。「（前略）アフガニスタンで起きた出来事から今の世界を眺めるとき、世界は末期的症状にさしかかっているように見えます。無差別の暴力は過去の自分たちの姿です。敵は外にあるのではありません。私たちの中に潜む欲望や偏見、残虐性が束になるとき、正気を持つ個人が消え、主語のない狂気と臆病が力を振るうことを見てきました。このような状況だからこそ、人と人、人と自然の和解を訴え、私たちの事業も営々と続けられます。ここは祈りを込め、道を探る以外にありません。祈りがその通りに実現するとは限りませんが、それで正気と人間らしさを保つことはできます。（後略）」（「ペシャワール会報」2016 年度報告第 136 号より引用）。

世界が果てるような僻地で荒れ果てた大地に命と緑と平和の灯を燈し続けて 37 年、小さいながらも暗黒の世界の一隅を照らし続けてこられた故人に心からの敬意を表したい。

発行：ペシャワール会　発売：忘羊社　　上巻：2023 年 6 月発行　定価：本体 2,700 円
下巻：2024 年 6 月発行　定価：本体 2,700 円

［追記］

- ●山とは無関係な本の紹介で恐縮です（著者は若い頃に福岡登高会のパキスタンの高峰ティリチミール峰 7,708m 遠征隊に同行医師として参加したことはあるが、登山の世界は？？）。
- ●著者は既に鬼籍に入られている上に、著者から福岡市のペシャワール会に宛てられた現地報告の集成版も本書下巻の発刊を以って終了し、今後は著者の新刊書籍が発行されることも無いと思われるので、下巻が発行されたこの機会にあえて紹介させて頂きました。

（酎　2024 年 6 月　記）